4

★☆☆ 解答時間 20分

／45

解説 32ページ

次の【文章Ⅰ】は、平安時代末期の歴史を描いた江戸時代の作品『月のゆくへ』の一節、【文章Ⅱ】は、源平の戦いを記した鎌倉時代の作品『平家物語』の一節である。どちらの文章も、同じ事件が語られており、【文章Ⅰ】は『平家物語』を資料として用いたとされている。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。なお、設問の都合で【文章Ⅰ】の本文の段落に 1 ～ 4 の番号を付してある。

【文章Ⅰ】

1 上の(注1)御元服の御定めとて、摂政殿(注2)、内に参らせ給ふ。御よそほひことに引きつくろはせ給ひ、御前(注3)どももきらきらしうて、たそがれも過ぐるほどに出で立ち給ふ。

2 大炊御門(注4)、猪隈のわたりに、思ひかけずあやしの者どもここら待ちうけ奉りて、えもいはずむくつけきふるまひをしつつ、御供なる人々をいたくなやまし聞こえて、乱りがはしう追ひののしり、髻をさへ切りたるものか。(ア)ゆくりもなきことにて、用意すべくもあらず、誰も誰もあきれまどひたり。殿はただ恐ろしきに、ものも覚え給はず、いみじきひたぶる心ある白波(注5)どもの立ちさわぐにこそはとおぼいて、いとはしたなくむくつけうさへなり給ひ、御車のうちにひれ伏し給ふ。からうじて御前ども参り集まりしかど、いひしらず見ぐるしき姿なれば、今夜はびんなしとて帰らせ給ふ。かう世づかぬ事は、盗人のしわざにはあらず、六波羅(注6)の入道のはからふこととて、資盛(注7)の侍従のつかうまつれるにや。

3 これは七月のころ、資盛の侍従、ものへまかりける道にて殿に行き逢ひ奉りしに、見知らぬさまに畏りもおかずうち過ぐるを、殿の御前ども「なめげなり」と咎め出でて、侍従を馬より引き下ろし、いみじうののしりければ、からうじて逃げていにけり。この侍従は、小松(注8)の重盛の次郎にて、六波羅の入道の孫なり。

4 いつしかこの事かくれなく、入道も伝へ聞きて、(イ)いとものしとおぼいたり。もとより心をさなく、くねくねしき人なり

Sample

ければ、いかでその恥すすぐばかりのことをものして思ひ知らせ奉らむと、起居心にかけわたり給ひけるを、殿にはつゆ知らせ給ふべきならねば、ただいかさまなる痴者にかとおぼされしに、かうなりけりと知りはて給ひては、いま少しおぼしよらぬことにて、めづらかにも、あさましうも、さまざまに御心もうごくべし。

【文章Ⅱ】

資盛朝臣、大炊御門、猪熊にて、殿下の御出にはなつきに参りあふ。御供の人々、「何者ぞ、狼藉なり。御出のなるに、乗り物より降り候へ降り候へ」と苛でけれども、あまりに誇り勇み、世を世ともせざりけるうへ、召し具したる侍ども、皆二十より内の若者どもなり。礼儀骨法わきまへたる者一人もなし。殿下の御出ともいはず、一切下馬の礼儀にも及ばず、**a**駆けやぶつて通らむとする間、くらさは闇し、つやつや入道の孫とも知らず、また少々は知つたれどもそら知らずして、資盛朝臣をはじめとして、侍どもみな馬よりとつて引き落とし、すこぶる恥辱に及びけり。資盛朝臣、はふはふ六波羅へおはして、祖父の相国禅門にこのよし**b**訴へ申されければ、入道大きに怒つて、「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはばかり給ふべきに、幼き者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かかる事よりして、人にはあざむかるるぞ。この事思ひ知らせ奉らでは、えこそあるまじけれ。殿下を**c**恨み奉らばや」と宣へば、重盛卿申されけるは、「これは少しも苦しう候ふまじ。頼政、光基なんど申す源氏どもにあざむかれて候はむには、まことに一門の恥辱でも候ふべし。重盛が子どもとて候はむずる者の、殿の御出に参りあひて、乗り物より降り候はぬこそ、尾籠に候へ」とて、帰られけり。

その後、入道相国、小松殿には仰せられもあはせず、片田舎の侍どもの、強らかにて、入道殿の仰せよりほかはまた恐ろしき事なしと思ふ者ども、難波、瀬尾を始めとして、都合六十余人召し寄せ、「来る二十一日、主上御元服の御定めのために、殿下御出**d**あるべかんなり。いづくにても待ち受け奉り、前駆・御随身どもが髻切つて、資盛が恥すすげ」とぞ宣ひけ

Sample

る。殿下、これをば夢にも知ろしめさず、主上明年御元服、御加冠(注14)、拝官の御定めのために、御直廬(注15)にしばらく御座あるべきにて、常の御出よりも e 引きつくろはせ給ひて、今度は待賢門(注16)より入御あるべきにて、中御門(注17)を西へ御出なる。

（注）

1 上――高倉天皇。【文章Ⅱ】の「主上」も同じ。

2 摂政殿――藤原基房。後出の「殿」や、【文章Ⅱ】の「殿下」も同じ。

3 御前――先払いの者。【文章Ⅱ】の「前駆」も同じ。

4 大炊御門、猪隈のわたり――大炊御門は平安京を東西に走る大炊御門大路、猪隈（【文章Ⅱ】では「猪熊」）は南北に走る猪熊小路のことで、両者が交わるあたりを指す。

5 白波――盗賊のこと。中国の故事に基づく表現。

6 六波羅の入道――平清盛。六波羅は清盛の邸宅のあった場所。【文章Ⅱ】の「相国禅門」「浄海」も同じ。

7 資盛の侍従――平資盛。

8 小松の重盛――平重盛。

9 はなつきに――出会いがしらに。

10 礼儀骨法――礼儀などの作法。

11 頼政、光基――源頼政、源光基。平家に敵対する源氏の武将。

12 難波、瀬尾――難波経遠、瀬尾兼康。難波は備前国、瀬尾は備中国の住人。

13 御随身――警備の官人。

14 御加冠、拝官――天皇が元服して初めて冠をつけ、その後臣下の官位を進めること。

15 御直廬――宮中の摂政・関白の休息所。

16 待賢門――大内裏に入る門の一つ。

sample

17 中御門――平安京を東西に走る中御門（なかみかど）大路。待賢門に至る。

Sample

問1　傍線部(ア)・(イ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)　ゆくりもなきことにて

①　あまりにもひどいことであって
②　いつも起こることでもないことで
③　いままで聞いたこともないことで
④　すっかり気を抜いていたことで
⑤　思いもかけないことであって

(イ)　いとものしとおぼいたり

①　妙に気にさわるやつらだと思っていた
②　とても不快だとお思いになっていた
③　かならず仕返しすべきだと思いました
④　たいへん情けないことだと思われた
⑤　いったいどうしたものかと思いなさった

sample

問2 波線部**a**～**e**について、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① **a**「駆けやぶつて」の「駆けやぶつ」は撥音便で、襲いかかってきた者たちの乱暴さを際立たせている。

② **b**「訴へ申されければ」は、「申さ」が謙譲の動詞であり、資盛から清盛への敬意を表している。

③ **c**「恨み奉らばや」は、「ばや」が詠嘆の終助詞であり、清盛の怒りが並大抵でないことを表している。

④ **d**「あるべかんなり」は、「なり」が伝聞の助動詞であり、清盛が基房の参内の日時を伝え聞いたことを表している。

⑤ **e**「引きつくろはせ給ひて」は、「せ」が使役の助動詞で、基房が家来たちに警固の準備を周到にさせたことを表している。

問3 **【文章Ⅰ】**の登場人物に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 基房は、帝の元服の件で参内したが、出発の準備を念入りに行ったこともあって、夜も更けたころに到着した。

② 基房の供の者は、見知らぬ者たちに襲われた理由にまったく思い当たる節がなかったので、一層恐怖心にかられた。

③ 清盛は、資盛が恥辱を受けたと聞き、今回の仕打ちは資盛だけでなく平家一門の名誉に関わる重大事だと憤慨した。

④ 基房は、突然襲ってきたのは平家一門の者であったと知ることになったものの、いま一つ納得がいかなかった。

Sample

問4　次に示すのは、授業で本文を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教　師――いま二つの文章を読みましたが、**【文章Ⅰ】**は、『平家物語』を資料にして描かれた作品だと言われています。しかし、『平家物語』をそのままなぞっているわけではありません。**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**には違う点もあって、それぞれに特徴がありますね。どのような違いがあるか、みんなで考えてみましょう。

生徒A――話の展開がまったく違うように思えるんだけど。

生徒B――そうだね。**【文章Ⅱ】**は、時間の流れのままに叙述が進んでいるけど、**【文章Ⅰ】**はそうじゃなくて、**X**という展開で叙述されていて、事件そのもののインパクトを強く感じられるね。

生徒C――それ以外にも、**【文章Ⅰ】**では、登場人物の発言はほとんどないのに、**【文章Ⅱ】**では発言が多いところも特徴的だよね。**【文章Ⅱ】**の**Y**、ここなんかは発言者の人物像や性格まで読み取れそうだよ。

生徒A――そう言われると、**【文章Ⅰ】**の叙述では、**【文章Ⅱ】**のような臨場感がだいぶ薄れてしまっている気がするよ。『平家物語』では、**【文章Ⅱ】**の後にもまだこの事件の叙述は続くんでしょう。だって、まだ、事件のハイライトは語られていないもの。ただ、それを**【文章Ⅰ】**ではこれだけの分量にまとめてあるから、内容がすっきりと理解できるけど、何か物足りないなあ。

教　師――確かにそう感じるかもしれませんが、**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**がどのようにして書かれたものなのかも考える必要がありますね。**【文章Ⅰ】**は、江戸時代に『平家物語』などの文献をもとに平安時代末期の歴史を書き綴(つづ)ったものです。一方**【文章Ⅱ】**は、源平の争乱からあまり時間が経(た)っていないときに、琵琶(びわ)法師によって語られたものを記録したものです。

生徒B――そうか、書き手の置かれた状況などによって違いが生じているわけだ。

生徒C――そうすると、**【文章Ⅰ】**や**【文章Ⅱ】**の描写について、**Z**ということが言えるかな。

Sample

教　師――こうして丁寧に読み比べると、おもしろい発見につながりますね。

(i)　空欄 X に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 1・3 段落が襲撃事件の発端となった場面で、その間に襲撃事件の場面である 2 段落が挟み込まれ、最後に 4 段落で事件の犯人の動機が世間の噂話（うわさばなし）によって明かされる

② 1・3 段落が襲撃事件の発端で、その間に襲撃の場面である 2 段落が挟み込まれ、4 段落では襲撃された者の当日の混乱ぶりが再度詳しく付け加えられる

③ 1・2 段落で襲撃事件の場面が描かれ、その事件の発端となった出来事が 3 段落で語られ、最後の 4 段落では、3 段落の内容を受け、さらに事件の後日譚（たん）が語られる

④ 1・2 段落で最初に起こった争いが描かれ、次にそこで打ち負かされた側が逆襲する場面が 3 段落で語られて、4 段落では、3 段落を受けて逆襲された側のとまどう様子が語られる

Sample

(ii) 空欄 Y に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 「何者ぞ」で始まる発言では、基房の供の者が、天下の摂政殿の通行に対して、資盛をはじめとする平家どもが下馬の礼を尽くさないのは無礼だと傲慢に振る舞っている

② 「たとひ殿下なりとも」で始まる発言では、清盛が、自分に対する侮辱ならまだ我慢できるが、幼い者たちに理由も告げずに乱暴をはたらくのは許せないと息巻いている

③ 「これは少しも」で始まる発言では、重盛が、敵対する源氏に辱めを受けたのなら恨むのももっともだが、資盛のほうが無礼をはたらいたのだから自業自得だとたしなめている

④ 「来る二十一日」で始まる発言では、清盛が、襲撃の犯人がわからないように、あえて片田舎から無頼(ぶらい)の徒を大勢集め、基房の髻を切って資盛の恥をすすげと気炎を上げている

Sample

(iii) 空欄 Z に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 【文章Ⅰ】は、「心をさなく、くねくねしき人」「めづらかにも、あさましうも、さまざまに御心もうごくべし」などと、客観的な事実だけでなく、登場人物に対する筆者の印象まで読み取れるような書き方をしている

② 【文章Ⅰ】は、「大炊御門、猪隈のわたり」「七月のころ」「小松の重盛の次郎にて、六波羅の入道の孫なり」などと、最初に起きた事件の場所や日時、当事者の血縁関係を正確に描こうとしている

③ 【文章Ⅱ】は、「殿下の御出」「礼儀骨法」「御直廬」などと、漢語を多用することで、漢文を公用語としている朝廷の権威をことさら強調し、対照的に無骨な武士たちの様子を印象づけようとしている

④ 【文章Ⅱ】は、「入道殿の仰せよりほかはまた恐ろしき事なし」「都合六十余人召し寄せ」などと、清盛の力の大きさを示すことで、平家の勢力が朝廷の権威を上回っていた状況をうかがわせる表現になっている

Sample

4 歴史物語 『月のゆくへ』 軍記物語 『平家物語』

設問	正解	配点	自己採点
問1 (ア)	⑤	5	
問1 (イ)	②	5	
問2	④	7	
問3	④	7	
問4 (i)	③	7	
問4 (ii)	③	7	
問4 (iii)	①	7	
自己採点合計			

【出典】

【文章Ⅰ】 ▼『月のゆくへ』巻一

成立……江戸時代後期

ジャンル……歴史物語

作者……荒木田麗女

内容・特徴…全二巻。平安時代から南北朝時代にかけて成立した、四つの歴史物語（『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』）を「四鏡」と呼ぶが、『今鏡』が扱う平安時代後期までと、『増鏡』が扱う鎌倉時代初期以降の間には、書き記されていない時代がある。本作品は、その空白の時代について記すことで、「四鏡」で扱われる歴史叙述を完結させることを目的とし、高倉天皇・安徳天皇の二代の事跡を記している。老人や仙人の昔語りの体裁を取る「四鏡」に倣って、時々訪ねてくる百歳を超した老人の語ったことを、作者が書き記したという形式を取っている。平家一門の盛衰が物語の中心になっているが、合戦場面を極力減らし、貴族の視点から平家の貴族的な面を描くことを意図し、あたかも天皇や貴族が政治の中心となって、栄華を極めていた時代の物語であるかのように構成・表現されている。

作者の荒木田麗女は伊勢の神官の家に生まれ、古典を学ぶ上で恵まれた環境に育ち、和歌・俳諧・漢詩・紀行・読本など、多方面にわたる著作がある。本書と同類の歴史物語『池の藻屑』（『増鏡』のあとを継いで後醍醐天皇以下十四代約二七〇年間の歴史を記す）も、よく知られている。

なお、本文は、『校註日本文学大系』（野村宗朔校註・中山泰昌編　誠文堂刊）によったが、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【文章Ⅱ】 ▼『平家物語』巻第一「殿下乗合」

成立……鎌倉時代前期

ジャンル……軍記物語

作者……未詳

内容・特徴…平清盛を中心として栄華を誇った平家一門の没落を和漢混淆文（＝和文体と漢文訓読文体とを織り交ぜて書かれた文章）によって描いた作品である。前半は平清盛とその一族の興隆と栄華、それに反発する勢力の陰謀などを中心に、後半は源氏勢の台頭と平家の都落ちから滅亡までを中心に描く。作品には仏教的無常観（＝この世のすべてのものは永遠の存在ではないという観念）というテーマが通底している。

『平家物語』は、その成立過程の事情から、多くの異本（＝同一の作品であるが、伝承の過程で語句や表現、本文の内容などに違いが生じている本）が存在し、様々な形で伝えられた。なかでも、琵琶法師が琵琶を奏でながら語る、平曲と呼ばれる語り物を通じて広まったことは、よく知られている。また、作中の多くの逸話は、能や歌舞伎をはじめとして後世の様々な文学や芸能に取り

Sample

入れられて再構成され、新しい作品が数多く生み出されるもととなるなど、後世に大きな影響を与えた。

なお、本文は、新日本古典文学大系『平家物語　上』（梶原正昭・山下宏明校注　岩波書店刊）によったが、読解の便宜を図るために途中省略をしており、また、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【全文解釈】

【文章Ⅰ】

天皇（＝高倉天皇）の御元服の御打ち合わせということで、摂政殿（＝藤原基房）が、宮中に参上しなさる。御装束を格別によく整えなさり、御先払いの者どもも美しい身なりで、夕暮れも過ぎるころにお出かけになる。

（ところが）大炊御門大路（と）、猪熊小路（とが交わる地点）のあたりに、思いがけず怪しい者どもが大勢待ち受け申し上げて、なんとも言いようもないほど恐ろしい振る舞いをしては、お供である人々をたいそう困らせ申し上げて、乱暴に追いたてて大声で騒ぎ、髻をまで切ってしまったことよ。思いもかけないことであって、前もって備えておくことができるはずもなく、誰もが皆ひどく驚き途方に暮れている。（摂政）殿はただ恐ろしいので、茫然としなさり、恐ろしい向こう見ずな心のある盗賊どもが騒ぎたてるので（あろう）とお思いになって、たいそう困惑し気味が悪いとまでお思いになって、御車のうちに倒れ伏しなさる。やっとのことで御先払いの者どもが参集したけれども、言いようもなく見苦しい姿なので、（摂政殿は）今夜は具合が悪いということでお帰りになる。このようにめったにない出来事は、盗人のしわざではなく、六波羅の入道（＝平清盛）が計画したこととして、資盛の侍従がしでかし申し上げたのであろうか。

これは七月のころ、資盛の侍従が、あるところへお出かけした道中で（摂政）殿に（偶然に）出会い申し上げた際に、見知らぬふりをして敬意を表すこともせずに通り過ぎるのを、（摂政）殿の御先払いの者どもが「無礼だ」と咎めたてて、侍従を馬から引きずりおろし、ひどく声高に騒いだので、（資盛は）やっとのことで逃げ去った。この侍従は、小松の重盛の次男で、六波羅の入道の孫である。

早くもこのことは広く知れわたり、入道も伝え聞いて、とても不快だとお思いになっていた。（入道は）もともと大人げなく、心のねじけた人であったので、なんとかしてその（資盛の受けた）辱めをすすぐほどのことをして（摂政殿に）思い知らせ申し上げようと、常日ごろ心にかけ続けていらっしゃったのを、（摂政）殿におかれては少しもわかりなさるはずもないので、ただ（先日乱暴をはたらいたのは）どのような愚か者であろうかとお思いになっていたのに、こうであったのだとすっかりおわかりになっても、いま一つ合点のゆきなさらないことであって、めったにないこととも、驚きあきれたこととも、あれこれと（摂政殿の）御心も揺れ動くのであろう。

【文章Ⅱ】

資盛朝臣が、大炊御門（大路と）、猪熊（小路の交差しているところ）で、摂政殿のお出かけに出会いがしらに行き合い申し上げる。お供の人々が、「何者だ、無礼である。（摂政殿の）お出かけだから、乗り物から降りなさい降りなさい」と急き立てたけれども、あまりに（平家の威光を）自慢して気負いいきりたって、世の中を何とも思っていなかった上に、召し連れていた侍どもは、皆二十歳以下の若者どもである。礼儀作法をわきまえている者は一人もいない。摂政殿のお出かけであるにもかかわらず、いっさい下馬の礼儀をとることもしないで、（馬で）走り突き破って通ろうとするので、（夕方の）暗さは暗い、まったく（相手が平清盛）入道の孫ともわからないで、また少々（の人）はわかっていたけれども素知らぬ振りをして、資盛朝臣をはじめとして、侍ども皆を馬からつかまえて引き落とし、たいそう辱め貶めた。資盛朝臣は、やっとのことで六波羅へいらっしゃって、祖父の相国禅門（＝平清盛）にこのようなことがあったと訴え申し上げなさったので、入道はたいへん怒って、「たとえ摂政殿であっても、（わたくし）浄海の身内には遠慮しなさるべきであるのに、幼い者を何の躊躇もなく辱め貶めなさったことこそ恨みの（生じる）なりゆきだ。このようなことからして、人にはばかにされるのだよ。このことを（摂政殿に）思い知らせ申し上げないでは、いることはできないだろう。摂政殿に仕返しをし申し上げたい」とおっしゃるので、重盛卿が申し上げなさったことには、「このことはまったく差し支えはございません。頼政、光基などと申

Sample

す源氏どもにばかにされましたならば、ほんとうに（平家）一門の恥でもございましょう。重盛の子どもとしておりますような者が、（摂政）殿のお出かけに行き合い申し上げて、乗り物から降りませんことこそが、無礼でございます」と言って、帰りなさった。

その後、入道相国は、小松殿（＝重盛）にはご相談もしなさらないで、片田舎の侍たちで、荒々しく無骨で、入道がおっしゃることより他にはまた恐ろしいことがないと思う者たちを、難波（なんば）、瀬尾（せのお）をはじめとして、都合六十数人を呼び集めなさり、「この次の二十一日、（高倉）天皇の御元服の御打ち合わせのために、摂政殿のお出かけがあるにちがいないそうだ。どこででも待ち受け申し上げ、先払いの者や御警備の官人どもの髻を切って、資盛の恥をすすげ」とおっしゃった。

摂政殿は、これを夢にも知りなさることはなく、天皇が来年の御元服（のとき）、御冠をはじめてつけ、（その後）臣下の官位を進める（儀式の）御打ち合わせのために、宮中の御休息所にしばらくいらっしゃる御予定で、いつものお出かけよりも身なりを整えなさって、今度は待賢門（たいけんもん）からお入りになる予定で、中御門（大路）を西へお出ましになる。

【設問解説】

問1　語句解釈の問題

(ア)

形容詞 ク活用 「ゆくりもなし」 連体形 **ゆくりもなき**	名詞 **こと**	助動詞 断定 「なり」 連用形 **に**	接続助詞 **て**

「ゆくりもなし」

1　突然だ。不意だ。

2　不用意だ。軽はずみだ。

＊「ゆくりもなし」は、「ゆくりなし」の「なし」の前に係助詞「も」が挿入された形で、意味は、「ゆくりなし」と同じである。

「ゆくりもなき」の意味に該当するのは、⑤「思いもかけない」だけである。よって、**正解は⑤**である。⑤は、「にて」の部分も「であって」と断定の助動詞「なり」と接続助詞「て」が適確に訳出されている。

文脈を確認すると、傍線部は基房一行が「あやしの者ども」に「思ひもかけず」襲われる場面であり、供の者たちの「髻」までも切られたことを「ゆくりもなきことにて」というのだから、「思いもかけないことであって」とするのは文脈的にも正しい。

(イ)

副詞 **いと**	形容詞 シク活用 「ものし」 終止形 **ものし**	格助詞 **と**	動詞 サ行四段活用 「おぼす」 連用形（イ音便） **おぼい**	助動詞 存続 「たり」 終止形 **たり**

「いと」

1　たいそう。とても。たいへん。非常に。

2　たいして。それほど。あまり。

＊2は打消表現と呼応している場合。

「ものし」

1　怪しい。不気味だ。

2　不快だ。目ざわりだ。

「おぼす」

1　〈「思ふ」の尊敬語〉思いなさる。お思いになる。

「いと」の意味に該当するのは、②「とても」、④「たいへん」で、「ものし」の意味に該当するのは、①「気にさわる」、②「不快だ」である。「おぼ

Sample

い」の意味に該当するのは、②「お思いになっ」、④「思われ」、⑤「思いなさっ」で、完了・存続の助動詞「たり」については、すべての選択肢が正しく訳出されている。よって、**正解は②**である。

文脈を確認すると、資盛が基房一行にひどい仕打ちを受けたことが世間でも噂（うわさ）になり、それが清盛の耳にも入って、清盛が、「いとものしとおぼいたり」というのだから、「とても不快だとお思いになっていた」とするのは文脈的にも正しい。

問2　語句と表現に関する説明の問題

①　波線部**a**

動詞 ラ行四段活用 「駆けやぶる」 連用形（促音便） **駆けやぶつ** 走り突き破っ	接続助詞 **て** て

「動詞の音便」

音便の種類　活用の種類

		原形	↓	音便形
1	イ音便　カ・ガ・サ行の四段活用の連用形	書**き**て	↓	書**い**て
2	ウ音便　ハ・バ・マ行の四段活用の連用形	思**ひ**て	↓	思**う**て
3	撥（はつ）音便　ナ行変格活用の連用形	死**に**て	↓	死**ん**で
	バ・マ行の四段活用の連用形	呼**び**て	↓	呼**ん**で
	ラ行変格活用の連体形	あ**る**なり	↓	あ**ん**なり
4	促音便　タ・ハ・ラ行の四段活用の連用形	渡**り**て	↓	渡**つ**て
	ラ行変格活用の連用形	あ**り**て	↓	あ**つ**て

※1はカ行、2はハ行、3は変格活用以外はバ行、4はラ行を例として挙げている。

「駆けやぶつ」を「撥音便」とするのが不適当。「つ」は前記4の促音便である。さらに、「駆けやぶつて」を「襲いかかってきた者たちの乱暴さ」とするが、「駆けやぶつて」は、基房の供の者たちから下馬を命じられたのを振り切って行こうとする資盛たちの様子であって、この後、襲いかかってきた基房の供の者たちの様子ではない。その点も不適当である。

②　波線部**b**

動詞 ハ行下二段活用 「訴ふ」 連用形 **訴へ** 訴え	動詞 サ行四段活用 「申す」 未然形 **申さ** 申し上げ	助動詞 尊敬 「る」 連用形 **れ** なさっ	助動詞 過去 「けり」 已然形 **けれ** た	接続助詞 **ば** ので

「敬意の方向」

1	尊敬語	地の文→「作者」から 会話文→「会話主」から	「動作の主体」に対する敬意
2	謙譲語	地の文→「作者」から 会話文→「会話主」から	「動作の受け手（客体）」に対する敬意
3	丁寧語	地の文→「作者」から「読み手」に 会話文→「会話主」から「聞き手」に	対する敬意

「申さ」を謙譲の動詞とするのは正しいが、「資盛から……の敬意」とするのが不適当である。波線部**b**があるのは会話の中ではなく、地の文である。前記2のように、地の文中の場合は「作者」から「動作の受け手（客体）」に対する敬意であるから、登場人物である資盛からの敬意ではない。なお、この場合動作の受け手は、本文に「祖父（おほぢ）の相国禅門に」とあるように、清盛になるので、「清盛への敬意」という点は正しい。

Sample

③　波線部c

動詞 マ行上二段活用 「恨む」 連用形 **恨み** 仕返しをし	動詞 ラ行四段活用 「奉る」 未然形 **奉ら** 申し上げ	終助詞 希望 **ばや** たい	

「ばや」を「詠嘆の終助詞」とするのが不適当である。「ばや」は、希望の終助詞で「～たい」と訳し、詠嘆の意味はない。

④　波線部d

動詞 ラ行変格活用 「あり」 連体形 **ある** ある	助動詞 当然 「べし」 連体形（撥音便） **べかん** にちがいない	助動詞 伝聞 「なり」 終止形 **なり** そうだ

「なり」の識別

1　終止形（ラ変型活用語には連体形）＋なり
　⬇伝聞・推定の助動詞「なり」（～そうだ・～という・～ようだ）
＊ラ変型活用語の連体形に接続した場合には、撥音便や、撥音便の無表記形に注意する。
〔例〕ある｜なり→あん｜なり→あ□｜なり

2　連体形・非活用語＋なり
　⬇断定・存在の助動詞「なり」（～だ・～である・～にいる）
＊存在の用法の場合は「体言（場所）＋なる＋体言」の形をとることが多い。

3　「―なり」の一語で物事の状態や性質を示す
　⬇ナリ活用形容動詞の活用語尾「―なり」
＊「―げ・らか・やか・がち・がほ」＋「なり」の形のものが多い。

4　連用形・副詞・助詞「に・と」＋なり⬇ラ行四段活用動詞「なる」
＊「～に・と・く・ず」＋「なり」の形のものが多い。

前記1の＊にあるように、「なり」の上がラ変型活用語の連体形で、撥音便になっているときの「なり」は伝聞・推定である。また、波線部は清盛の発言の中にあり、「殿下御出（ごぎょしゅつ）」が「あるべかんなり」というのだから、「清盛が基房の参内の日時を伝え聞いた」と伝聞で解釈するのは文脈的にも正しい。よって、**④が正解**である。

⑤　波線部e

動詞 ハ行四段活用 「引きつくろふ」 未然形 **引きつくろは** 身なりを整え	助動詞 尊敬 「す」 連用形 **せ** なさっ	動詞 ハ行四段活用 「たまふ」 連用形 **給ひ**	接続助詞 **て** て

「引きつくろふ」

1　（身なりを）きちんと整える。
2　とくに気を配る。とり繕う。

「す」

1　〈使役〉～せる。～させる。
2　〈尊敬〉～なさる。お～になる。
＊下に尊敬の補助動詞「給（たま）ふ・おはす・おはします」が付かない場合、「す」は使役であることが普通である。
＊下に尊敬の補助動詞「給ふ・おはす・おはします」が付く場合、「す」は尊敬であることが普通だが、使役の対象（誰々に）が明らかな場合は使役である。

「せ」を「使役の助動詞」とするところが不適当。前記「引きつくろふ」の

Sample

意味からも、ここは基房自身が参内するための身なりをいつもの外出のときよりも整えたのであって、家来たちにさせたのではない。また、「警固の準備を周到にさせた」というのも、「引きつくろふ」の意味には該当しない内容なので、不適当である。

問3　登場人物に関する説明問題

それぞれの選択肢に対応する本文を確認して検討する。

①の基房については、1段落から2段落にかけて記述がある。

上の御元服の御定めとて、摂政殿、内に参らせ給ふ。御よそほひことに引きつくろはせ給ひ、御前どももきらきらしうて、たそがれも過ぐるほどに出で立ち給ふ。……からうじて御前ども参り集まりしかど、いひしらず見ぐるしき姿なれば、今夜はびんなしとて帰らせ給ふ。（1段落1行目～2段落5行目）

「引きつくろふ」〔ハ行四段活用動詞〕

【設問解説】問2波線部e参照。

「御前」〔名詞〕

1　貴族の行列の前方に立って先導すること。先払い。また、その人。

＊「ごぜん」と読む。

「びんなし」〔ク活用形容詞〕

1　不都合だ。具合が悪い。

2　かわいそうだ。

「引きつくろは」は、直前に「御よそほひ」とあるので、前記1である。「びんなし」は、直前に「いひしらず見ぐるしき姿」とあるので、宮中に行くのにそのような姿では不都合だと考えると、前記1で解釈するのがよい。

基房が、天皇の元服の儀式の打ち合わせのために、宮中に参上するのに際し、装束を格別によく整え、先払いの者どもも美しい身なりにして夕暮れも過ぎるころに出かけたところ、暴漢に襲われ、見苦しい姿となったためどうしようもなくて帰ったというのである。

①は、「夜も更けたころに到着した」が不適当である。「たそがれも過ぐる」ときに出発し、その途中で暴漢に襲われて帰ったのだから、宮中には到着していない。

②の基房の家来については、2段落に記述がある。

御供なる人々をいたくなやまし聞こえて、乱りがはしう追ひののしり、髻をさへ切りたるものか。ゆくりもなきことにて、用意すべくもあらず、誰も誰もあきれまどひたり。（2段落2・3行目）

「ののしる」〔ラ行四段活用動詞〕

1　大声で騒ぐ。

2　評判になる。

「ゆくりもなし」

【設問解説】問1(ア)参照。

「あきる」〔ラ行下二段活用動詞〕

1　驚き途方に暮れる。茫然とする。

「まどふ」〔ハ行四段活用動詞〕

1　迷う。

2　途方に暮れる。

3　あわてる。

4　ひどく～する。

＊4は動詞の連用形に付く補助動詞の用法。

「ののしり」は、暴漢が「乱りがはしう追」うのだから前記1で、「まどひ」は、「あきる」の連用形に接続しているので、前記4である。

供の者たちは暴漢に襲われ、ひどいことをされたが、思いもかけないことだったので、ひどく驚き途方に暮れたというのである。

②は、「基房の供の者は……襲われた理由にまったく思い当たる節がなか

Sample

ったので、一層恐怖心にかられた」が不適当である。思いもかけない出来事だったのであって、思い当たる節がないと、襲われた理由を考えている内容は本文になく、それによって一層恐怖心にかられているわけでもない。

③の清盛については、2段落と4段落に記述がある。

かう世づかぬ事は、盗人のしわざにはあらず、六波羅の入道のはからふこととて、資盛の侍従のつかうまつれるにや。（2段落5・6行目）

基房一行を襲ったのは盗人でなく、清盛の計略で、資盛が実行したのだろうかと語り手が推測しているという内容で、選択肢③には直接関係しない。4段落の記述も確認する。

いつしかこの事かくれなく、入道も伝へ聞きて、いとものしとおぼいたり。もとより心をさなく、くねくねしき人なりければ、いかでその恥すすぐばかりのことをものして思ひ知らせ奉らむと、起居心にかけわたり給ひけるを、（4段落1・2行目）

「ものし」

【設問解説】問1(イ)参照。

「いかで」〔副詞〕

1　どうやって。
2　どうして。
＊疑問・反語に関係する語と呼応する場合。
3　なんとかして。どうにかして。ぜひとも。
＊意志・希望・願望に関係する語と呼応する場合。

「ものす」〔サ行変格活用動詞〕

1　ある。いる。
2　行く。来る。
3　生まれる。死ぬ。
4　する。
＊他の動詞の代わりをする語で、文脈に合わせて具体化する必要がある。

「いとものし」の「ものし」は、格助詞「と」に接続しているので、形容詞「ものし」の終止形で、ここでは孫の資盛がひどい目にあわされた状況を踏まえると、前記2である。「いかで」は、「思ひ知らせ奉らむ」と呼応している。「む」が意志なので、前記3の意味である。「ものして」の「ものし」は、接続助詞「て」に接続しているので、動詞「ものす」の連用形で、ここでは直前に、資盛がひどい目にあわされたことに対して、「その恥すすぐばかりのことを」とあるので、仕返しをするといった意味である。

4段落の引用部分は、資盛が基房一行からひどい仕打ちを受けたという噂が清盛の耳にも入り、不快に思って、その恥をすすごうと機会をうかがっていたという内容である。

③は、清盛が、基房の家来の仕打ちを「平家一門の名誉に関わる重大事だと憤慨した」とする部分が不適当である。清盛が仕返しをしようと考えたのは、4段落1行目にあるように、清盛の「心をさなく、くねくねしき」人間性によるものであって、平家一門の名誉に関わるとは考えていない。

④の基房については、4段落に記述がある。

殿にはつゆ知らせ給ふべきならねば、ただいかさまなる痴者にかとおぼされしに、かうなりけりと知りはて給ひては、いま少しおぼしよらぬことにて、めづらかにも、あさましうも、さまざまに御心もうごくべし。（4段落2～4行目）

「つゆ」〔副詞〕

1　少しも。まったく。
＊打消表現と呼応する。

「あさまし」〔シク活用形容詞〕

1　驚きあきれるばかりだ。
2　ひどく。はなはだしく。
＊2は、連用形の用法。

基房は、最初は暴漢が誰かわからず、どんな愚か者がしたのだろうかと思っていたが、その後、清盛、資盛といった平家一門のしわざだと真相がわか

Sample

ってからもいま一つそれが信じられず、めったにないことだとか、驚きあきれたことだとか（「あさましう」はここでは、前記1）と、心が揺れ動いていたというのである。

④が正解である。基房が「襲ってきたのは平家一門の者であったと知ることになったものの、いま一つ納得がいかなかった」とするのは、この部分の内容と合致している。

問4　【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の比較の問題

(i)　生徒Bの発言にあるように、**【文章Ⅱ】**は時間の流れのままに叙述が進んでいるので、**【文章Ⅱ】**で事件のあらましを整理すると次のようになる。

1　襲撃事件の発端となる出来事〈**【文章Ⅱ】**1～5行目〉

資盛一行と基房一行が大炊御門大路と猪熊小路の交わるところで出くわし、無礼をはたらいた資盛一行は、基房の供の者たちにさんざん辱めを受けた。

2　1について清盛の反応〈**【文章Ⅱ】**5～8行目〉

資盛が祖父の清盛に訴えたことで、清盛は、自分の身内に敬意を払わず、屈辱を与えたことを恨み、これをきっかけに平家がばかにされることを憂いて、仕返しを誓う。

3　1について重盛の反応〈**【文章Ⅱ】**8～10行目〉

それに対して、その場にいた重盛が、源氏にばかにされたのなら平家一門の恥だが、摂政に礼儀を尽くさなかった資盛が愚かなのだと清盛を諫（いさ）める。

4　仕返しの具体化〈**【文章Ⅱ】**11～13行目〉

清盛は重盛に相談せずにいよいよ仕返しを決行する。基房が出かける日を狙って、清盛の配下の者で、基房側に顔の知られていない地方の侍を使って基房を襲わせる。

5　襲撃の直前〈**【文章Ⅱ】**14～15行目〉

基房は清盛の陰謀もまったく知らずに、高倉天皇の元服の儀式の打ち合わせのために参内しようと、中御門大路を西に向かう。

6　襲撃事件とその後日譚（たん）〈**【文章Ⅱ】**では省略〉

次に、**【文章Ⅰ】**の各段落を、これまでの各設問での検討も参考にして順に内容を確認すると、

1段落

基房が高倉天皇の元服の儀式の打ち合わせのために内裏に出発する。

2段落

基房一行が襲撃される場面と、その襲撃犯に対する作者の推測。

3段落

資盛一行が基房に無礼を働いたために、資盛が基房の従者によって辱めを受けたことの説明。

4段落

3段落の事件の噂が清盛の耳に入り、資盛が恥辱を受けたことを知って清盛は仕返しを考える。さらに、事件の後日譚として、基房が事件の内情を知ったが、腑に落ちない様子が語られる。

【文章Ⅰ】を**【文章Ⅱ】**の流れに即して対応させると、次のようになる。

【文章Ⅱ】		**【文章Ⅰ】**
1	⟷	**3段落**
2	⟷	**4段落**の前半
3	⟷	**記述なし**
4	⟷	**記述なし**
5	⟷	**1段落**
6（省略）	⟷	**2段落**と**4段落**の後半

【文章Ⅰ】は、襲撃事件のクライマックスを最初に記述して読み手の関心を引き、その後に、事件の発端や襲撃事件が起こるまでの経緯、後日譚を続けて、事件の背景を読み手にわからせるという展開になっている。言うなれば、**【文章Ⅱ】**を劇的な展開に再構成していると言えよう。

以上を踏まえると、**正解は③**である。「1・2段落で襲撃事件の場面が描かれ」が、**【文章Ⅱ】**の**5・6**に、「その事件の発端となった出来事が3段落で語られ」が、**【文章Ⅱ】**の**1**に、「最後の4段落では、3段落の内容を受け、さらに事件の後日譚が語られる」が、**【文章Ⅱ】2**と、省略されている**6**の内容に対応して、**【文章Ⅰ】**の展開が正しく捉えられている。

Sample

①は、1段落を「襲撃事件の発端となった場面」とするのが不適当。1段落は襲撃に直接続く場面であり、発端ではない。さらに、「4段落で事件の犯人の動機が世間の噂話によって明かされる」とあるが、「世間の噂話」が不適当である。「世間の噂話」は、資盛が受けた恥辱についてであり、清盛の動機が噂話で明らかにされたのではない。

②は、1段落を「襲撃事件の発端」とするのが不適当。①と同じで、1段落は襲撃に直接続く場面であって発端ではない。さらに、「4段落では襲撃された者の当日の混乱ぶりが再度詳しく付け加えられる」も不適当である。前記のように4段落の後半は事件の後日譚で、事件当日のことではない。

④は、「1・2段落で最初に起こった争いが描かれ」が不適当である。前記のように1・2段落は仕返しの襲撃事件そのものであって、「最初に起こった争い」ではない。さらに、「打ち負かされた側が逆襲する場面が3段落で語られ」も不適当である。3段落はこの襲撃事件の発端となる、最初に起こった争いである。

(ii)　**【文章Ⅱ】**の登場人物の発言内容に関する吟味の問題である。

①は基房の家来の発言で、本文は以下のようになっている。

「何者ぞ、狼藉なり。御出のなるに、乗り物より降り候へ降り候へ」（【文章Ⅱ】1・2行目）

この発言から、①は「資盛をはじめとする平家どもが下馬の礼を尽くさない」が不適当である。「何者ぞ」とあるように、基房の家来は狼藉をはたらいている者が平家の者だとはわかっていない。さらに、「つやつや入道の孫とも知らず」とあって、資盛がそこにいることもわかっていない。

②は清盛の発言で、本文は以下のようになっている。

「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばばばかり給ふべきに、幼き者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かかる事よりして、人にはあざむかるるぞ。この事思ひ知らせ奉らでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨み奉らばや」（【文章Ⅱ】6～8行目）

この発言から、②は「自分に対する侮辱ならまだ我慢できるが」が不適当である。清盛の発言では、「浄海があたりをばばばかり給ふべき」とあって、清盛の周辺（＝身内）の者には遠慮すべきだ（＝少々の無礼には目をつぶるべきだ）と言っているのであるから、そもそも清盛自身に気をつかうのは当然だということが前提にあり、自分への侮辱を我慢できるとは言っていない。

③**が正解**である。これは重盛の発言で、本文は以下のようになっている。

「これは少しも苦しう候ふまじ。頼政、光基なんど申す源氏どもにあざむかれて候はむには、まことに一門の恥辱でも候ふべし。重盛が子供として候はむずる者の、殿の御出に参りあひて、乗り物より降り候はぬこそ、尾籠に候へ」（【文章Ⅱ】8～10行目）

この発言から、③の「敵対する源氏に辱めを受けたのなら恨むのももっともだが、資盛のほうが無礼をはたらいたのだから自業自得だとたしなめている」は適当である。源氏に恥辱を受けたのではないので、平家一門の恥でなく、摂政に無礼をはたらいた資盛が愚かだと言っているのである。

④は清盛の発言で、本文は以下のようになっている。

「来る二十一日、主上御元服の御定めのために、殿下御出あるべかんなり。いづくにても待ち受け奉り、前駆・御随身どもが髻切つて、資盛が恥すすげ」（【文章Ⅱ】12・13行目）

この発言から、④は「基房の髻を切って」とするのが不適当である。清盛は「前駆・御随身ども」の髻を切って恥をかかせてやれと言っているのである。

(iii)　**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**の表現について検討するのだが、内容的な適否の吟味もする必要がある。

①**が正解**である。**【文章Ⅰ】**について、清盛の人柄を「心をさなく、くねくねしき人」とし、基房の心情を「めづらかにも、あさましうも、さまざまに御心もうごくべし」と記すことで、事件がどのような経緯で起こったかといった「客観的な事実」がわかるだけでなく、「登場人物に対する筆者の印象まで読み取れる」とするのは正しい。

②は、**【文章Ⅰ】**についての、「『大炊御門、猪隈のわたり』『七月のころ』……最初に起きた事件の場所や日時……を正確に描こうとしている」が、本文の内容として不適当である。**【文章Ⅰ】**に記されている「大炊御門、猪隈のわたり」は、資盛が仕返しのために基房を襲った場所であり、「七月」は

その襲撃事件の発端で、資盛が恥辱を受けた日時である。「最初に起きた事件」は、資盛が恥辱を受けた事件を言うのだから、その点で不適当である。ただし、事件の当事者については両事件とも資盛で、その父は重盛であるから、「当事者の血縁関係」の記述は適当である。

③は、**【文章Ⅱ】**について、「漢語を多用する」というのは、**【出典】**でも記したように、『平家物語』の表現の特徴である和漢混淆文からして正しいが、それによって「朝廷の権威をことさら強調し」とまでは、本文からは判断できない。よって、それを前提にした「対照的に無骨な武士たちの様子を印象づけようとしている」も適当ではない。

④は、**【文章Ⅱ】**について、「『入道殿の仰せよりほかはまた恐ろしき事なし』『都合六十余人召し寄せ』などと、清盛の力の大きさを示す」というのは間違いとは言えないが、それによって「平家の勢力が朝廷の権威を上回っていた」とまでは本文からは判断できない。この点が不適当である。

Sample